

# 鈴木寛・文部科学副大臣と 土屋了介・行政刷新会議主査が講演



「ここだけの話」が聞けるのはクローズドな会ならではの



規制・制度改革で存在感を示す土屋主査



省庁の壁突破にも力を発揮する鈴木文科副大臣

2011年度予算案の審議も大詰めを迎えていた3月7日。弊誌主催で第4回「現場からの医療刷新についての勉強会」を開催した。第1回から参加を続ける鈴木寛・文部科学副大臣とともに、今回は行政刷新会議「規制・制度改革に関する分科会」ライブイノベーション(LI)ワーキンググループ(WG)主査の土屋了介氏(癌研究会顧問)も登壇した。会場の東京・港区「料理王国Academyサロン」には、医療界のリーダーや医療関連の企業関係者らが参加した。

前半は鈴木氏が「文科省が取り組むLI」と題し講演した。まず、菅直人政権が掲げる「新成長戦略」におけるLIの位置付けの重要性を指摘。社会と経済・産業の双方から見たLIの必要性を解き明かした。さらに、医薬品開発の流れと日本の現状に視点を移す。

鈴木氏が指摘する問題点の説得力には、野党時代から築いてきた研究開発の現場との意見交換の質と量が現在も衰えて

いないことが背景にある。鈴木氏は1月7日に内閣府に発足した「医療イノベーション推進室」の地ならしにも尽力。省庁の壁を超えた取り組みが今後も期待される。

続いて、土屋氏が「行刷新会議規制・制度改革分科会LIWG」をテーマに講演。現在進行形の問題とあって参加者の注目度は高い。現状の医療供給体制への疑問から説き起こし、規制・制度改革にどう立ち向かうかの背景を明らかにしていった。外添要一・厚労相時代から政策提言に関与してきた経験の蓄積をうかがわせる内容だ。「医療クラスター」や「医療版中央銀行」などの年来の主張も登場した。

質疑応答では、「そのまま検討会が立ち上がる」(鈴木氏)ほどの顔ぶれとなった参加者と講演者の間で活発な議論が交わされた。質疑応答の後は、懇親の席に移行。政務に忙殺される鈴木氏もスケジュールを調整して参加し、鈴木・土屋両講師を核に参加者同士の交流の輪が広がった。



質疑応答では続々と手が挙がった。松本純夫・国立病院機構東京医療センター院長 安藤高朗・永生会理事長



堀口彰・小林製薬特別経営顧問



懇親会場では談笑の輪が広がった。矢崎義雄・国立病院機構理事長(左)と土屋氏



平山登志夫・晴山会理事長(左)



(左から)松本氏、武藤徹一郎・癌研究会常務理事、(1人おいて)矢崎氏、鈴木氏



武藤氏(左)や鈴木氏(右手前)と語らう藤井正秀・京セラ丸善システムインテグレーション常務取締役(中央)



(左から)竜崇正・千葉県がんセンター前センター長、藤原研司・横浜労災病院名誉院長、平山氏